

# BOOK Review

## 薬剤師レジデントマニュアル 第3版

評者 宮崎 長一郎 有限会社宮崎薬局代表取締役・長崎市



薬学教育6年制を経た薬剤師が誕生して10年がすぎた。その数は約9万2000人を超える。この数字は現在医療に従事している薬剤師の約40%に当たる。この間に医薬分業の指標である処方箋発行率は75%を超え、街の薬剤師は処方箋を扱うのが主たる業務になった。また病院では薬剤師が病棟にいるのは特別なことではなくなった。評者が薬剤師になったばかりの1985年頃、薬局薬剤師は医薬分業を、病院薬剤師はクリニカルファーマシーをめざして病棟業務を、それぞれ目標に頑張っていた。それがある程度達成され、教育制度も臨床を重視する6年制へと移行したわけである。

薬剤師を取り巻く状況の中で免許を取得した新人は保険薬局でも病院でも患者に向き合いながら薬物治療に関わることが日常になっている。しかしながら、保険薬局や病院は薬学生の実務実習を受け入れていくことに精いっぱい、卒後の研修には手が回らなかったのが実情である。卒後研修は制度的には確立されておらず、オンザジョブトレーニングに頼っているのが現状である。

その中であって、本書の編者である橋田亨先生は、レジデントプログラムを自らが薬剤部長を務める病院にて制度化し、実践されてきた。その経験から「コモンディーズに関する薬物治療は頭に叩き込んでおくべきである」という信念のもとに編まれた本書は実践的な構成が

されており、新人薬剤師にとって必読ともいえる要素が並んでいる。

ともすれば、こういった薬物治療のマニュアル的な書物は単に疾病の解説と医薬品の説明を詰め込んでいるだけのものが多いが、本書の第1章は「調剤」である。薬剤師の本筋をまず確認した上でDI、TDM、スペシャルピュレーションに関する注意点へと進み、フィジカルアセスメントまで簡単な解説を掲載した後に疾病の薬学管理へと移っていく。最初の疾患は感染症であり、全ての診療科で等しく薬剤師がアドバイスすべき疾患から導入されているという点が現場を知り尽くした編者の配慮と感じた。

疾病に関する項目も、単に疾患の解説と薬物療法を記述するだけでなく、病態、標準処方例の後には、「薬剤師による薬学的ケア」や「処方提案のポイント」を設け、薬剤師の視点から薬物療法を的確に遂行するための行動指針を示している。

本書の記載は簡潔かつ丁寧であり、新人薬剤師にとってみれば現場の手の届くところに携えておくと便利な書物といえる。また保険薬局の薬剤師にとっても薬学管理の指針として便利であることには違ひなく、備えておきたい一冊である。

橋田 亨, 室井 延之, 西岡 弘晶 編

B6変型/400頁/2021年/定価3,850円(本体3,500円+税10%) / ISBN978-4-260-04578-0 / 医学書院刊